

市内小学校英語活動の現状と方向性

—「小学校英語活動の手引き」 “Let's Enjoy English Time” の改訂—

小学校英語活動研究会議

研修員 関野千穂子 (川崎市立新作小学校) 塩山 智子 (川崎市立古市場小学校)

渡辺 修宏 (川崎市立宮内中学校)

指導主事 金子 勉

I 主題設定の理由

様々な課題を抱える昨今の教育問題の中でも、小学校における英語活動は社会から大きな注目を浴びているものの一つである。小中高と10年間学んでも日常会話すらできないというわが国の英語教育は、長らく批判の対象になってきた。その対策として、ALT制度の導入や全国英語教員の必修研修、さらには「英語が使える日本人育成のための行動計画」など、国家的な施策が実施されてきた。しかしそれらの成果だけではまだ十分とは言えない。これらの対策よりも小学校英語導入による社会全体への影響は、経済効果を含め格段に大きいと思われる。大きいだけに議論も白熱し、中央教育審議会教育課程部会の発表が遅れる一因にもなっている。

主として産業界や保護者の中に賛成派が多い一方で、頑強な反対派も少なくない。小学校英語に反対の趣旨の著作が複数出版され、それらが少なからぬ支持を得た。また最も事態を難しくしている事実、実際の小学校教員の多数が英語活動に関する養成や研修を経験していないことである。このような状況ではあるが、文部科学省教育課程課教科調査官の話(平成19年2月)では小学校英語の必修化は非常に可能性が高い。

このような中で、現在の市内の現状を精査し、無理なく取り組める英語活動を模索することは重要である。小学校における英語活動を抵抗無く推進できるような手立てを考えることを目当てに、本テーマを設定した。

II 研究内容

全国の先進校や研究推進校での実践や文部科学省の現時点での意向をまとめ、先ず市内各小学校での共通課題を整理した。川崎市内でも現在、英語活動としての実践を積み重ねている学校は年々増加の傾向にあり、ALTやEAF(英語活動補助員)の配置も定着しているが、推進するに従って共通の課題も出てきている。例えば3・4年生で楽しく英語活動を経験した児童たちが、高学年になると英語が楽しいと受け止める割合が減少してくる傾向にある。また英語指導の経験が少ない小学校の先生が多いという事実もある。このような状況から、揺籃期にありながらも、今の時点で考えられる小学校英語活動の方向性を示唆することを研究内容とした。具体的には年間カリキュラムの作成、評価規準の設定、授業研究やフォニックスの指導法(注:p.241参照)などである。そして3年前に発行された「小学校英語活動の手引き」を改訂することで、具現化した。

1 英語活動導入に関する動向

中央教育審議会教育課程部会外国語専門部会から審議の状況の報告が出された(2006年2月)。要点をまとめると以下ようになる。またその後、条件整備に関して同年10月に全国指導主事会議で発表されたが、その後内閣改造や予算の見直しもあり、今のところ未確定な要素も多い。

(1) 小学校英語の必要性

- ① 小学生の柔軟な適応力はコミュニケーションへの態度の育成に適している。
- ② グローバル化が進む中、近隣諸国でも導入が進み、保護者や一般企業からの要求も強い。
- ③ 教科として英語教育を実施している学校も増加しており、教育の機会均等を確保する必要がある。

(2) 教育目標

- ① 英語を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること
- ② 言語や文化についての理解を深めること
- ③ 英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむこと（スキル面）

この中で①②が基本であり、③は付随的なものである。つまり中学校の英語科の前倒しではない。

(3) 教育課程上の位置づけ

高学年において特に充実する必要がある。そして学習の一定のまとまりを確保するためには年間35時間程度の設定を検討する必要がある。しかし教科として扱うかどうかは今後の検討が必要である。

「領域」か「総合的な学習の時間」か「特別活動」の中で位置づけを検討する。

(4) 指導者

小学校教員の英語力を踏まえると、学級担任とALTなどとのチームティーチングを基本とする。外国人と直接コミュニケーションを図ることは大いに有効であることから、ALTの一層の充実を図る必要がある。また今後、研修による小学校教員の英語指導力の向上は検討課題である。

(5) 条件の整備

- ①全国の小学校約40校に1校の割合で拠点校を決め、その地区の中心的な役割を担うこととする。
- ②都道府県、政令指定都市から指導主事1名を召集し、指導者養成研修を5日間ほど開く。
- ③上記の研修を受講した者が中心となり、各学校の代表1名（中核教員）を対象に各地区で研修を行う。
- ④活動の目安となる「英語ノート」を作成する意向であったが、予算が成立せず「提示」にとどめる。

何よりも新学習指導要領の告示や解説書の発行を待って、本格的に年間計画の作成、研修の計画その他の動きをとることが基本である。

2 本市の実態の把握

川崎市内全114校に行った調査（平成19年1月実施）から、市の実態が以下のように明らかになった。

(1) 学年別の実施学校数

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
実施学校数	100校	102校	107校	106校	114校	109校

<考察>すべての小学校がいずれかの学年で実施しているが、全校で行っているのは5年生だけである。文部科学省は中学校への接続の意味から高学年の実施を重点的に考えているが、一方実際には高学年の方が低・中学年よりも歌やゲームなどの活動がやりにくいという意見があり、今後の課題である。

(2) 教育課程上の位置づけ

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
総合の時間			96校	94校	103校	101校
特別活動等	74校	73校	4校	6校	4校	3校
教育課程外	26校	29校	7校	6校	7校	5校

<考察>現行の学習指導要領では「総合的な学習の時間」（中高学年）で行うことが基本であるが、特別活動で行っている学校も多いことがわかった。この位置づけの問題では特に新学習指導要領に注視したい。

(3) 活動時間数別の学校数

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
0時間	14校	12校	7校	8校	2校	5校
1時間	9校	6校	7校	3校	4校	5校

2時間	11校	15校	11校	5校	8校	6校
3時間	17校	14校	11校	10校	11校	7校
4時間	11校	12校	9校	17校	9校	11校
5時間	17校	15校	16校	15校	17校	11校
6時間	13校	12校	12校	8校	10校	13校
7時間	3校	5校	5校	5校	8校	5校
8時間	3校	6校	8校	7校	11校	9校
9時間	2校	3校	5校	7校	4校	5校
10時間	11校	11校	15校	17校	19校	24校
11時間	3校	3校	1校	5校	4校	2校
それ以上	0校	0校	7校	7校	7校	11校

<考察> 1～3年生では半数以上の学校が、年間6時間以下ということになる（表内の影つき部分）。学級の数にもよるが、学級で数えると年間1～3時間くらいの英語活動という実態である。

4～6年生では少し増えるが、それでも10時間以下の学校が100校ほどとなる。1クラスあたり3時間以下の実情である。ALTかEAFのどちらかがほとんどの学校を訪問し、なおかつ学校独自で非常勤講師も利用している事実を勘案すると、英語活動の多くの時間が外国人講師とのTTということになる。今後推進すべきである担任の先生による英語活動は、現時点ではほとんど行われていないということがわかる。ごく一部の学校（県教委の委託校や国際理解の研究推進校）だけで担任主導の授業が行われている状況である。担任の先生ができる授業内容を研究する必要がある。

（4）活動内容（複数回答）

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
歌やゲーム等英語に親しむ活動	100校	99校	103校	104校	105校	101校
挨拶、自己紹介など簡単な英会話	81校	83校	92校	101校	103校	104校
英語の発音の練習	67校	65校	74校	79校	87校	85校
交流活動など異文化に触れる活動	24校	19校	33校	38校	45校	49校
文字に触れる活動	5校	7校	9校	16校	29校	38校

<考察> 歌やゲーム、挨拶等の活動はほとんど100%と言える。一方、発音の発音練習はもっと多くてもいいのではないと思われる。

異文化に触れる活動は意義が大きいと思うが、それほど多くは行われていない。

また文字に触れる活動が少なからず行われている現状が明らかになった。上級生になるにしたがって文字に興味を持ったり、その活動が増えるのは自然だと思われる。一方低学年から文字に触れている学校が数校あるが、慎重に扱わないと英語嫌いを早い時期から作ることになりかねず、十分な注意が必要である。

（5）使用教材等（複数回答）

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
絵本などのテキスト教材	66校	68校	77校	75校	78校	75校
CDなどの音声教材	66校	71校	75校	70校	79校	65校
ビデオなどの映像教材	9校	8校	13校	17校	17校	13校
その他	21校	19校	18校	25校	29校	19校

<考察> 担任の先生が一人で授業を行うなら、特に教材が重要となる。絵本にしてもCDにしても、もっと多くの学校で使用する必要があると思われる。またビデオは音声と画像の双方で実践的な英語に触れること

ができ、有効な教材であるがこの数値は非常に低い。やはり TT が多く行われているからであろう。

3 目標と評価（規準）について

何をどこまで扱ったらよいのか、という素朴な疑問が少なくないが、これには元国立教育政策研究所の総括研究官である渡邊寛治氏が中心となってまとめた「目標に準拠した小学校英語教育の進め方」が参考になる。本市の実態に合わせて、以下のように目標と評価の観点、評価の規準を設定した。

(1) 小学校英語教育の目標

英語活動を通して、外国の言語や文化に慣れ親しみ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと話すことなどの実践的なコミュニケーション能力の基礎を養う。

(2) 評価の観点

評価の観点	評価の観点の趣旨
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動を行い、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする。
コミュニケーション力	簡単な英語を聞いたり、用いたりして、互いの気持ちを伝え合う。
言葉や文化への関心・意欲と理解	主に音声言語やそれと密接な関係にある文化・風習などに関心を持ち、意欲的に理解をする。

(3) 評価規準

	低学年	中学年	高学年
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	英語の音や表現に興味を持ち、意欲的に楽しんで歌ったり、真似したりしている。	自分の身の回りのことについて、簡単なコミュニケーション活動にすすんで取り組んでいる。	身の回りのことだけでなく、外国の話題などについても色々な人と積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。
コミュニケーション力	英語の音の特徴を真似している。 相手のごくやさしい英語に日本語や非言語で応じている。	相手が伝えようとする簡単な英語を理解している。 相手のやさしい英語に英語を交えて応じている。	自分の気持ちや考えを発話している。 英語特有のコミュニケーションの方法を身につけている。
言葉や文化への関心・意欲と理解	世界には日本語と違う国があることを知っている。 諸外国の遊びや言葉に興味を持っている。	諸外国にはそれぞれ違う風習・文化があることを知り、関心を示している。	世界の文化と日本の文化の違いや独自性に気づき、異文化を多少なりとも理解している。

4 授業研究

実際に小学校の英語活動がどのように行われかを観察し、担任ができる活動を模索し、課題等を改めて考察した。下記の例は研修員による授業だが、次のことが明らかになった。

- 動作が伴う歌やチャンツは、音を体感する意味でも有効であり、児童は楽しそうに活動する。
- たくさん英語をシャワーのように聴く事は、すべてがすぐに身につくわけではないが、有意義である。
- 絵本の読み聞かせは児童の関心を引きつけ、絵とせりふの自然な繰り返しが言語習得につながりやすい。
- 福笑いのように児童の興味をひきつける活動は、自然に児童から英語を発話させるのに有効である。

第 2 学 年 英 語 活 動 略 案

題材名 : 「あたま かた ひざ ぽん」

目 標 : ●簡単な歌や挨拶、ゲームを通して、友達と関わりながら英語に親しむ。

●体の部分を表すことばや方向を表すことばに触れる。

言語材料 : head, shoulder, knee, toe, eye, ear, mouth, nose, arm; up, down, right, left

本時の展開 :

		児 童 の 活 動	留意点・評価など
5 分	挨拶・歌	<はじめのあいさつ、英会話体操> ① ALTとあいさつをする。 ② 英会話たいそうを歌いながら踊る。	・相手の顔を見て挨拶できる。 ・はずかしがらずに大きな声で、楽しく歌い踊る。
15 分	活動と	<体に関する英語を思い出そう、おぼえよう> ③ “Head, shoulders, knees, and toes”を歌う ④ 体の部位の言葉を練習する。 ⑤ 歌にあわせておどる。 ⑥ Simon Says のゲームを行う。	・歌を聴いたり歌ったりして、既習の英語のことばを思い出す。 ・体の部位に触れながら発音を真似る。 ・真似しながら、楽しくおどる。 ・楽しくゲームに参加する。
20 分	ゲーム	<A Teddy Bear で福笑いゲーム> ⑦ 教師が絵本を読むのを聴く。 ⑧ 方向を表す言葉を練習する。 (up, down, left, right, stop など) ⑨ 代表児童が前に出て、副笑いゲームをする。	・絵を見て英語を聴きながら内容を想像する。 ・体を動かしながら単語の意味を感じる。 ・見ている全員が英語を使おうとする。
5 分	まとめ	<活動を振り返ろう> ⑩ 感想を2,3人に発表させる。 ⑪ 終わりのあいさつをする。	・新しく知ったことや、がんばった友達などを発表して振り返りをする。

5 手引き書の改訂

これまでに入手した各研究発表会や研修会等の資料を参考にし、小学校英語活動の最新の動向をさぐり、あわせて市内全校への調査をもとにして課題を明らかにした。そして、その疑問や課題に対応できる手引き書の改訂を3年ぶりに行った。内容はほぼ以下のとおりである。

- 小学校英語導入の現在の動向
- 年間カリキュラムや1単位時間の授業事例
- 小学校英語に関するQs & As
- やさしい教室英語や日常英語表現集
- 語彙集、ソング集、ゲーム集

6 フォニックス指導の導入

(1) フォニックス導入にあたって

これまでの小学校英語活動では、文字はほとんど扱ってこなかった。しかし本研究会議では、以下の理由から、上級生には文字を見せ、ある程度の単語を自ら発音できるようにさせることを提案したい。

① ローマ字との関連

4年生はローマ字を少ない時間ではあるが学習する。子音と母音が結びついて一つの音を出す規則性は英語に通じるものである。また現在マスコミにあふれるカタカナ英語は語彙の習得に有効だが、アルファベットで書かれているものも少なくない。駅名の表示もヘボン式ローマ字である。それらの身近な英語を小学校英語活動に有効に利用すべきだと考える。

② 高学年での知的欲求に応じる

4年生までに英語の歌やゲームに素直に親しんだ児童が、高学年になるにしたがってそれらの活動に飽き足らず、英語活動に意欲を見せない状況がかなり報告されている（平成17年度研究協力校）。自我意識に目覚めたり、授業を面白いだけでなく、目に見える成果を求める自然な欲求が原因かと思われる。日本語の地名でも英単語でも、「なんて読むのだろう」「読みたい」という気持ちは当然である。歌やゲームは音を学ぶには最適だが、目に見える形で後に残らないという欠点もある。

(2) 実際の指導について

①ローマ字指導との関連

4年生でローマ字を学習するときには、自分の名前を書いたり、友達の名前を読んだりする活動には大変関心が高く意欲的である。しかし扱える時間数は少なく、特に小文字は定着することが難しい。数年後中学校で学習しなおすという状況は児童の興味を持続させているとは言えず、望ましい接続ではない。

②フォニックス指導とは

字と音の結びつきのルールをフォニックスと呼び、英語圏の子どもたちは多く小学校で学んでいる。ABCを日常において「エイブージー」と発音することは少なく、むしろ「ア、ブ、ク」と発音するほうが实际的である。子音と母音を結びつけて日本語の音を構成することは、4年生で学習したローマ字と共通点があり、その意味でも有効な指導となる。

フォニックスの基本ルールを繰り返し練習し身につけて、未知の単語の発音がおおよそ想像できることは、初学者にとっては随分学習への抵抗感が減少する。書き言葉に対する抵抗を取り除くためにもフォニックスの指導を推進したい。

Ⅲ 研究のまとめ

(1) 研究の成果

- 市内の実態を調査することで、小学校英語活動のほとんどがTTであること、先生方の英語活動への抵抗はかなり強いこと、音声重視の指導が多いが中には文字を扱う指導も行われていること、などが明確になってきた。
- 小学校英語活動に慎重になっている先生方が少なくないが、市内の実践校の実例を指し示すことができた。特に「小学校英語活動の手引き」の改訂をすることで、いくつかの疑問を解決したり、担任の先生が行える活動例を示すことができた。
- 英語が苦手な学級担任の先生でも推進しやすい活動は、ビデオ聴取や絵本の利用、絵（単語）カードの活用であることがわかった。

(2) 今後の課題

- 担任の先生が推進する授業プランやカリキュラム試案を立てたが、年間を通して実行できたわけではない。他の多くの実践研究もまだ数年間継続して試行したものは少ない。低学年から英語活動を継続した児童がどのように変容していくかを見取り、指導計画を再考することは大きな課題である。
- 英語に苦手意識の高い先生がどのように授業を進められるかも課題である。今回「ビデオ教材」や「読み聞かせ」活動などを提案したが、多くの試行が必要だと思われる。

【参考文献】

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 『目標に準拠した小学校英語教育の進め方』日本教材文化研究財団 | 2006年 |
| 「第9回英語活動公開授業研究会資料」川崎市立小学校国際教育研究会 | 2006年 |
| 『さいたま市小学校英語活動の手引き』さいたま市教育委員会 | 2005年 |
| 『小学校英語活動実践の手引き』文部科学省 | 2001年 |